

## V 被災地における防災ボランティア研修の報告

### 1 目的

県内高等学校、中等教育学校の代表生徒が、東日本大震災における被災地を訪問し、災害ボランティア活動等を体験するとともに、震災遺構や現在の復旧・復興状況を実際に視たり、聞いたりすることを通じて、「自助・共助」について学び、被害を減らす方法や支援者としての関わり方等について考える。また、安全で安心な社会づくりに貢献する資質や能力を養う。

さらに、訪問後には、高校生地域防災ボランティアリーダーとして県内高等学校等において経験した内容等を伝えることで、県内高校生の防災に対する意識の高揚につなげる。

### 2 訪問期日・場所

平成27年8月26日(水)～28日(金) 岩手県上閉伊郡大槌町、大船渡市、陸前高田市

### 3 訪問者

県内高等学校、中等教育学校から訪問を希望する学校(各校防災担当教職員等1名、代表生徒1名)、担当指導主事

代表生徒は、高校2年生以下の生徒とする。

※平成27年度は、県立岡山東商業高等学校、県立総社高等学校、県立津山工業高等学校、県立備前緑陽高等学校から生徒、教職員を派遣した。

### 4 研修内容

8月26日(水)

時間	内 容
7:40	岡山駅 新幹線改札口前集合
8:00	岡山駅発 - 東京駅 - 新花巻駅(14:41着) - 貸し切りバスで移動
17:00～ 18:30	大槌高等学校との交流会 ① 学校の説明 ② 大槌高校での復興の取組について ③ グループトーク(大槌高校生と岡山県高校生が2グループに分かれて実施)
	釜石市内宿泊





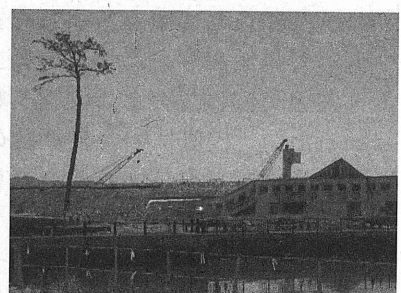
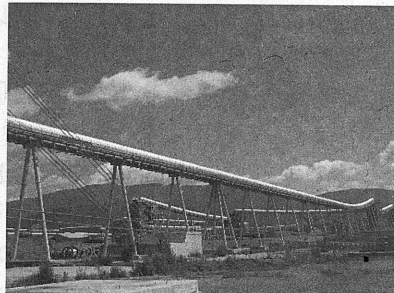
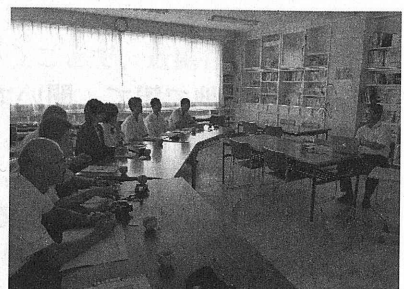
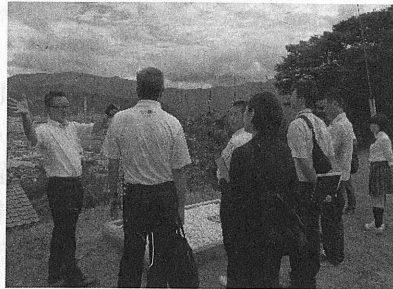
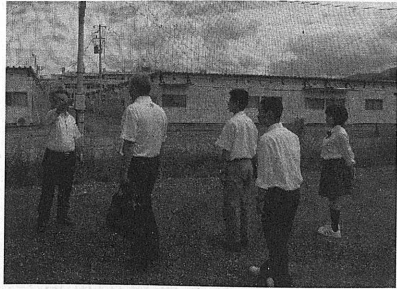
8月27日(木)

時間	内 容
10:00～ 12:00	ボランティア活動 吉里吉里海岸清掃活動(岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里)
12:00～ 13:00	貸し切りバスで移動 昼食
13:00～ 14:00	新生おおつちの方からの講話 和野っこハウスにて
14:00～ 16:30	大槌町内の復興状況視察 AMD A職員による説明
	釜石市内宿泊



8月28日(金)

時間	内 容
9:30～	大船渡中学校の校長先生からの講話
10:30	大船渡市立大船渡中学校にて
10:30～ 12:00	貸し切りバスで移動 陸前高田市内の復興状況視察 昼食
14:48	一ノ関駅発 — 仙台駅 — 東京駅 — 新大阪駅 — 岡山駅(20:45着) 新幹線待ち時間に解散式を実施
20:50	岡山駅 新幹線改札口にて解散



## 5 成果報告伝達について

9月末までに

- ・レポート提出

9月～1月中

- ・各学校において報告会を実施。時間、形式については、学校の実態に応じて開催。

2月

- ・岡山県実践的安全教育総合支援事業報告集に被災地派遣の写真、レポートを掲載。

翌年8月頃

- ・H28 高校生「地域防災ボランティアリーダー養成」研修会において、被災地における防災ボランティア研修の成果を発表予定。



## 6 被災地における防災ボランティア研修に参加して

### <参加生徒の感想>

実際に被災地で観て、聞いて、体験して、あなたは何を感じましたか。

- 現地を訪れて私が一番に感じたことは、震災前に戻るには程遠いということ。それを感じたのは、大槌高校に向かっている道中だ。新幹線やバスの車窓に流れていた穏やかな田園風景は、沿岸部に近づくにつれて徐々に減っていき、かわりに更地や土盛り工事の範囲が増えていった。土盛りの山を縫うように敷かれた仮設の道路。歪んだポールなど所々に残る被害の爪痕。家を建てようにも、町全体を高くする土盛り工事が完了しなければ建てられないそうだ。町のなかには新しく建てたような家屋も見られたが、土がむき出しになっている範囲の広さに、東日本大震災が与えた被害の甚大さを改めて感じさせられた。

大槌高校の生徒との交流では、当時小学生だった生徒から「何が起きているのか分からなかった。」「校庭にいた自衛隊の人を見て、いつもと違う感じがしていた。」など、小学生ならではの目線で話してもらった。高校生たちの復興に向かう取り組みは数多く、町役場や地域の方と一緒にやることに大きな意味があると思った。

2日目は海岸清掃と和野っこハウスにて新生おおつちの方の講話、町内視察と濃い内容だった。海岸清掃では吉里吉里海岸を歩き、ゴミを取り除く手伝いをした。当時のゴミはほとんど残っていないが、カーテンレール付きのカーテンやおもちゃなど生活感を感じるものを見つけたとき、胸がざわついた。

海岸付近にはまだ手付かずの道路も残っていた。講話会場の和野っこハウス隣りには仮設住宅が並び、そこには今でも約500世帯が住んでいるという。ハウスには年配の方が集い、憩いの場となっていた。新生おおつちの方の講話では、大人の目線で経験した震災を話してもらった。2人のボランティアに関する話で強く心に残った言葉がある。

男性「ボランティアに来てくれることはもちろん嬉しい。抱き合ってくれる人もいる。でも、それは一時だけの温もりで、身内や知人を亡くした喪失感が消えることはない。」

女性「仮設住宅を回っているとき、こんな話を聞いた。ボランティアの方が仮設の住民と仲良くなり、ただでさえ狭い部屋に宿泊し、ご飯も住民が準備する。帰り際には手土産まで持たせてあげる。これはボランティアではないよね？」

この話が意味する言葉は「責任・自覚」だと思う。ボランティアは「してあげる」ものではなく、「させてもらうもの」という自覚を持った行動がボランティア側にも必要だと思った。

町内視察では、城山公園から見下ろした景色が忘れられない。城山公園は山の上に位置し、多くの人々が避難してきたという。1日目からずっと見てきた更地、高い位置から眺めると見える範囲の8割以上が土盛りだ。公園には震災前の写真が設置されていたが、沿岸も形が変わっていたため、どこの写真なのか判別が難しいほどだった。

釜石東中学校（当時）とその周辺から石材店までバスで通った。中学生が小学生の手を引き一緒に避難した経路は坂になっており、日頃の訓練の成果が現れたものだと思う。

3日目は大船渡中学校校長先生の講話と、奇跡の一本松を見る日程だった。大船渡中学校のグラウンドには、今でも仮設住宅が並んでいる。半分は空き部屋らしいが、校庭から通う生徒も数人いるという。仮設住宅が建ってから、グラウンドで活動していた部活動は中庭や駐車場を利用している。講話で校長先生が言った「自分を支えてくれている人がいる。そんなあたりまえを守るためにも、一人一人が絶対生き抜くという気持ちを持たないといけない。それが自助で有り、共助にも繋がる。」これは今回の目的にもなっていた「自助・共助」を学ぶ基本となる言葉だと思った。校長先生が力をもらったという動画。日本全国から寄せられた言葉を集めたその動画は学校の報告会で必ず放映しようと思った。



奇跡の一本松では、ベルトコンベアを使った土盛り工事の規模に圧倒された。震災前、松原があった位置にその影はなく、一本だけ残った松。枯死と診断されたがその姿を復興のシンボルとして残そうと、工事を進めた。現在はモニュメントとして設置されている。陸前高田をはじめ堤防を14メートルほどに高くする計画がされているということで、近隣住民からは松原のような景観が失われるのではという声もきかれているという。

2日目にお世話になったAMD Aの方に、話を伺った。県外の方に伝えたいことは、「災害は、いつ・どこの・だれに起きてもおかしくない。3.11を風化させるのではなく、教訓として覚えておいてほしい」ということ。被災された方々は一步一步復興に向けて進んでいる。「教訓にしてほしい」というのは、交流した方、話を聞いた方全員の思いだと思う。

- 現在の復興状況を見たとき鳥肌が立った。震災から4年前、僕は小学6年生。当時多くのテレビで、震災の状況を目にしていた。過去と比べ、がれきは片付いているものまだ多くの生々しい被災当時の面影が残っていた。特に海岸の防波堤が傾いている場所は、印象的だった。「ここまで高くそして強い波が、多くの人の生活を奪うのか」と思った。

初日、大槌高校生の僕と同じ一年生に「震災後防災についての意識はどのように変化したか。」と尋ねたところ、「大切な人が死ぬと思って生活するのが一番」といった。同じ年齢ということもあり、僕には強い衝撃的な言葉だった。また地域によって復興状況が違うことそして震災を忘れようとする動きがあることに驚いた。グループトークでは、以前から考えていた‘方言クイズ’で楽しく会話できた。やっぱり高校生どこへ行っても変わらないなと思った。新生おおつち会の方々の話と重なるところもあった。中島さんのお話では、ボランティアの本当の意味を学んだ。「ボランティアとは無償でやること？しかたなくやること？」この言葉を考えると今まで見返りのために、そして自分のためにしてきたのかもしれない。結論、僕は相手の気持ちなんて考えていなかった。最終日には今でなお考えさせられる問を金先生からいただいた。「自助した方より共助した方のほうが多く亡くなった。‘自助・共助とは？’まだ奥には、答えが見つけれそうにはない。

今回の研修はとても短く今では一瞬の出来事のように感じられる。しかし学べたことはとても多く、なかなか処理できない。自分の夢は、自衛官になること。その夢の一步にもなったと思う。

- 被災地に実際に行ってみて、やはり復興はまだまだ進んでいないように見えたけれど、仮設の商店街などがあり復興に向けて少しずつ歩んでいるのだと感じました。

初日に大槌高校に行ってみて、一部の学校では震災のことは忘れようという考えの高校もあるとおっしゃっていました。そんな考えの学校がある中で、大槌高校は復興に向け頑張ろうと考え、地域のためになにができるだろうと常に考え頑張っているそうです。

2日目にはあいにくの雨で、予定していた畑作業ではなく海岸の掃除でした。震災から4年と少し経ったといっても未だに海岸にはビニールや缶などが流れつき落ちていて、まだまだ海岸がきれいになるには時間がかかりそうです。

このボランティアに参加して思ったことは、バスからふと街をみたときにガイドの方がほとんどの土地へ盛り土をすと言って復興には時間がかかりそうだなと思いました。しかし色々な方の話を聞いていると被災し家族や家をなくした人々でもみんな前を向いていて本当にすごいなと思いました。

- 最初にこの岩手に行くことが決まってから、ほんとに自分が代表して行くのかと実感がわきませんでした。しかし、岡山駅でインタビューをされてから気持ちが変わりました。

初日はほとんどが移動で、2時間しか行動しませんでした。その2時間がとても濃い時間でした。僕がその2時間で学んだことは、ネットなどには書かれていない事ばかり、実際の被災者の言葉はとてリアルです。その日は2時間のみだったが、次の日に1日、今日みたいなことが学べると思うととても興味が湧きました。

2日目、3日目では、中学校の校長先生から聞いた話がとても印象に残っています。地震がおきて体育館でおにぎりを分け合った味、火事で夜は体育館の窓が赤くなり汗をかいて昼はとても凍えるように寒かった事、亡くなった人達の中には、ほかの人のために亡くなった人が多い事、高校生や中学生など若い人たちのおかげで本当に助かった事など。刺激的な事が多すぎて一つ一つきりが無いほどの感想があります。

今回の経験を活かして、岡山県であなたができることは何ですか。

- 今回の目的を考えたとき、「伝える」ことが自分たちの使命だと思う。私が思う必ず伝えなければいけないことは、「自助・共助」「風化させない・教訓に」の2点だと思う。「共助の気持ちで人の手を引いている間に亡くなった。」そうなれば、残された家族は、喪失感に押しつぶされそうになりながら生活する。「自助の気持ちで逃げ遅れた人を無視し、その方は亡くなった。」。そうなれば、無視したことを悔やみ続け生活する。自助と共助、どちらが正しいという正解は無いと思う。しかし、その場面になったとき、自分ならどうするかを考えるだけで変わってくると思う。

岡山県から私達（高校生）が出来ることは限られている。被災地に影響を与えようと思うのではなく、「風化させないようにする」「教訓として身につける」ことが岡山県民の防災意識向上に繋がると思う。

岡山県は災害が少ないと言われていても、絶対には無いとは言えないので常日頃から考え、いつ災害がおこっても大丈夫なように家に帰って家族と話し合い、避難場所を決めておいたり、対策が必要です。自分達1人1人の意識で少しでも災害にあったときの被害に差が出ると思うので、学校で行われる年2回の避難訓練でも、これは本当に起こったことだと思って訓練することが大切だと、まずは周りの友達から伝えていきたいです。

- 研修の目的である“「自助・共助」について考え経験した内容を伝えること”を基本として多くの岡山県の方々に防災について考えてもらえるよう努力していく。まず、僕の学校では文化祭があるので校内展示し生徒また一般の方々に情報を発信する。

今回の研修では、地震・津波の災害について多くのことを学んだ。応用して岡山の防災についてキーワードを考えた。台風・異常気象・土砂崩れなどがあげられる。これらのテーマから岡山の防災意識を変えていければと思う。加えて被災者の方々の支援をしていく。

- 岡山県は災害が少ないと言われていても、絶対には無いとは言えないので常日頃から考え、いつ災害がおこっても大丈夫なように家に帰って家族と話し合い、避難場所を決めておいたり対策を練っておくことが必要です。

自分達1人1人の意識で少しでも災害にあったときの被害に差が出ると思うので、学校で行われる年2回の避難訓練でも、これは本当に起こったことだと思って訓練することが大切だと、



まずは周りの友達から伝えていきたいです。

- この夏岩手に行ってきた自分は生き方が変わりました。普通という事がどれでけ幸せなことか、その中に大きな幸せがあります。1日1日を何となく過ごすのはとてももったいない。僕は今までの自分を振り返り、これからもある1日を濃く生きようと思いました。そして今あたりまえに生活できていることはとても大きな幸せです。今を大切に。

### <参加教職員の感想>

- 東日本大震災から四年が経ち、これまで私は東北へ二回訪れました。一度目は、震災から一年後、宮城県女川町周辺を訪問しました。がれきが山のように積まれ、全く復興の目途がたっていない程の状況を目の当たりにしました。二度目は、震災から二年後、仙台市内へ訪問しました。津波の影響が少なかった内陸に旧友がいたため、そちらへ赴き、今の生活について話を聞きました。その友人は、震災前の日常に戻りつつあるものの、家の壁は崩れ、床が傾いているため小さなストレスを感じるなどの話をしてくれました。

今回、三度目の訪問の機会をいただきました。町の風景や、学校生活、ボランティアの方々の活動など様々な復興の様子について知ることができました。

まず町の風景は、一度目に訪れた風景とは違い、人の手によってかなり整備されつつあるという印象でした。復興計画により、町全体を盛り土によって高くするため、工事車両が常に行き来し騒音も激しく、落ち着かない感じがしました。また、仮設住宅が未だいたるところに点在しており、四年を経て今なお、住居が安定していないことに寂しさを感じました。

また、岡山県の高校生と大槌高校生との交流では、同年代から震災当時の話や現在の学校生活、復興のための活動などの話を聞くことができ、大変貴重な時間だったと思います。

現在の高校生は、震災時は小学生だったようですが、当時は自分の身に何が起きているのかよくわからず、避難所でも友人がたくさんいて遊んでいた。などという意外な声を聞き、一人一人の震災への感じ方も違うということを知ることが出来ました。

また、「新生おおつち」や「和野っこハウス」の方、また、大船渡中学校の校長先生の貴重なお話も聞くことができました。この話の中で共通して印象に残ったことは、震災当時の話を始めた時の表情でした。これらの方々は、町の復興に向けて、日々様々な活動をしておられます。今回、我々にも現在の活動の様子をとて前向きに話して下さいましたが、震災時の様子を話し始めたとき、表情が陰しくなりました。家族、親戚、友人、近隣の方などの死に直面し、心の傷は癒えることがない事を知りました。

今回2泊3日の研修に参加し、多くの方々の話を聞いたり、ボランティア活動もしたりしました。その中で私が一番感じたことは、「被災者はいつも『死』と向かい合って日常を送っている。」ということでした。私たちは日常、そのような事を意識しながら生活していることは少ないと思います。家族や友人、隣人が「明日死ぬかもしれない」と思いながら生活はしていないだろうと思います。しかし、被災した方々は少なからずそれらと向かい合って生きているのです。

大災害が少ないと言われている岡山であっても、事件や事故、災害は、身近にあります。「明日何が起こるか誰にもわからない」からこそ、災害への備え、家族や友人、地域の方々への感謝を忘れてはならないと思います。

今回の研修で見たこと、聞いたこと、感じたことを今後、様々な機会にしっかりと伝えたいと思います。

○ 東日本大震災の被災地である岩手県の大槌町・釜石市・大船渡市を訪れた。8月26日から2泊3日の日程で、県内の高校生4名と指導者5名が防災への取組がどのように行われているのかを学ぶとともに、現在、急ピッチで復興が進められている被災地の姿を見てきた。

最初に訪問した大槌高校では、震災直後に1,000名以上の人が校舎で避難所として生活していた時、生徒や教職員が炊き出し、物資運搬、トイレの水汲みなどの「共助」の活動を率先して行ったこと、また、町内唯一の高校として、地域の復興を支援する活動に積極的に取り組んでいること聞き、今後も大槌町を背負っていくのだという前向きで未来志向の意気込みを感じることができた。

仮設住宅内に設置された交流スペースでは、生活支援員の方から、自身が津波から間一髪で逃れた話や、入居者は順次仮設住宅から出て行くが職場がなく、若者の人口流出に歯止めがかからないこと、また高齢者のケアは、深刻な課題として、継続的な見守り・支えが必要だということ伺った。

その後、各地の被災地を視察したが、壊滅的な被害を受けた街は、まだまだ復興とは程遠い状況で、震災直後のがれきはきれいに撤去されているものの、広大なさら地が広がっているところや、やっと都市計画が決まり、5m~10mの土盛りをし、街ごとその上に復活させようとしているところもあった。大槌町では、ちょうど27日が震災直後から町長を務められた碓川氏の退任の日だった。地元の新聞には「4年間だったが、何期も町長を務めた気がする。よく頑張れたものだ」という町長のコメントが載っていた。

ボランティア活動として、砂浜での清掃活動を行った。大きながれきは取り除かれているが、缶やビニール袋などのごみはまだ海岸に流れ着くようだ。また、過去にはきれいな海水浴場だった場所も、砂が流出してしまっている所も多いそうだ。震災を風化させないためにも、今後も、末永いボランティア支援が必要だと感じた。

大船渡中学校の金賢治校長からは、震災直後から陸前高田市の教育長として学校の再開、復興に不眠不休で取り組まれたお話を聞き、学校を管理し、生徒の命を預かる責任者としての使命や困難を乗り越えた者だけが語れる確かな理念、確信に満ちた言葉を聞くことができ、大変感銘を受けた。金校長自身も自宅を津波に跡形なく流され、避難所生活経験し、現在もアパート生活を余儀なくされているようだ。しかし、そのような中であっても、金校長からは多くの人への感謝と未来に向かう前向きな言葉しか出てこなかった。大きな困難があるほど、人としてどう生きるか、そして生徒や周りの人たちをどう支えるかを真正面から考え行動する姿は教育に携わる者の鑑といえる。「自助」「共助」をどう解釈し、何があっても命を守ることを優先することの大切さを強調されていた。また、「津波てんでんこ」に代表されるように、命を守るための原理・原則である「すぐに逃げる」「大丈夫という油断をしない」そして、大人や教師は生徒に見てもらえるに値する背中を見せることであると結ばれた。さらに、サプライズがあり、金校長自身の作詞作曲による歌を披露していただき、心から絞り出すようにしてつくった曲に自然と涙が頬を伝った。

是非、多くの皆さんに聴いていただきたいと思う。

自然の脅威の前では人は無力でしかなく、災害は予想をはるかに超える場合もある。さまざまな人からお話を聞いたが、我々が聞きたかった防災教育や具体的な防災訓練について、それを絶対的なものとは語られなかったように感じた。「釜石の奇跡」は事実でありその大切さを示している。決して教育や訓練の重要性を否定するものではないが、防災に特效薬はなく、ごく一般的なことをいかに意識して行動に移せるようにするか、地道で真剣な取り組みを継続することしか道はないことを表しているのだと感じた。そして、ひとたび甚大な被害を受けた時、助け合わなければいけないこと、あくまで前向きな行動力が求められること、人はどれだけ強くなれるのかを学ばせていただいた。



終わりに、このような貴重な機会を与えていただくとともに、お世話になりました関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

- 私は、今まで何も知らず、知ろうとしていなかった事に今回の3日間の研修を通して気付かされました。

一番初めに驚いたのは大槌高校に向かうバスの窓から見ていた、ここに本当に栄えた町並みがあったのかと思ってしまうような何もない土地や、未だにたくさんある仮設住宅です。他にも研修を進めていく中で、当時避難所となっていた学校でのお話、現地で行ってきたボランティア活動、仮設商店街、アムダの方による当時や現在の状況説明を聞いたりして、改めて4年の歳月を経ても残る災害の爪痕に本当に驚きました。

現地で実際に行った活動は、海岸にあるゴミをみんなで拾って歩くというものでしたが、清掃活動を行いながらアムダの方にお話を聞いていると、未だにロープや車のナンバープレートなど震災当時のものがあがってくるがあると聞いて驚きました。他にも沿岸にあるぐにゃぐにゃに曲がってしまったガードレールや、へし曲がった街頭などは当時のままのようで津波の力強さを改めて実感しました。

和野っこハウスでの女性のお話もとても印象に残っています。家族が心配で家に戻ってしまったことによって命の危機にあったという話を聞いて、家族がバラバラになったときの連絡の手段も考えたことがなかったなど自分自身の事を思いました。心のどこかで、自然災害を他人事に思っていたことに気付きました。

今までの岡山県は、私の知る限り自然災害による被害が他県に比べて少ないからか、研修中も何度も言われていたように県民性として防災意識が低いと思います。しかし、誰もが被災者になりうる可能性があります。私に何ができるのかまだ分かりませんが、この貴重な経験を関わってくださった多くの方々、支援してくださった方々、東北の方々、未来の災害から救われるべき人々のためにできる限り伝え続けていきたいです。そして、学校という現場で働いていることを上手く活用し、一人でも多くの生徒たちに生き抜く力を身に付けさせたいと思いました。

この度は貴重な研修に参加させていただき本当にありがとうございました。

- 今回、初めて被災地に行かせていただけるという機会を与えていただいて本当に感謝しています。最初に被災地に行ってみて、あのような震災があったにもかかわらず、今を懸命に生きている姿に胸を打たれました。わたしたちがいろいろとテレビなどで聞いたり、映像を見たりする以上に、悲しく辛い体験をみなさんが経験しているのにもかかわらず、生かされた命を大切にするという心を随所に感じることができました。このボランティアに行く前は、ボランティアという形ではあるけれども、被災地に行くということが現地の方々にとっては、必ずしもいい意味を持たないのではないかと考えていたのですが、2日目に和野っこハウスでお二人の話聞いて、「ボランティアに来てくださることを聞くと、こっちにもがんばるぞ！という刺激になりありがたい。」と言ってもらったことですべてが吹き飛んだような気がしました。生徒たちにとっても大変に有意義な研修になったのではないかと感じています。

大船渡中学で、金校長先生が「とにかく死なないこと！」残された遺族の身になれば、絶対に誰も死んではいけない。実体験をもとに率直に感じられたこととお聞きして、何通りもの悲しみ方があるということ、命の尊さを感じられたことが1番の良い点になりました。

また、2日目にAMDAの大久保さんに大槌町内を案内していただいている時に、最後に「大槌に残りたいけど、雇用がない、子育て環境がない。」という切実な想いを聞いて、まだまだ震災の爪跡は深いということあらためて感じました。

私たちの力ではなんともならないようなこともたくさんありますが、この体験を伝え、命のありがたみを感じるということが大切になってくるのだと思います。金先生が、周りの人たちに本当に助けられたと言われていたのですが、自助、共助のバランスを大切にしながら、懸命に生きていかなければいけないことを学ぶことができました。